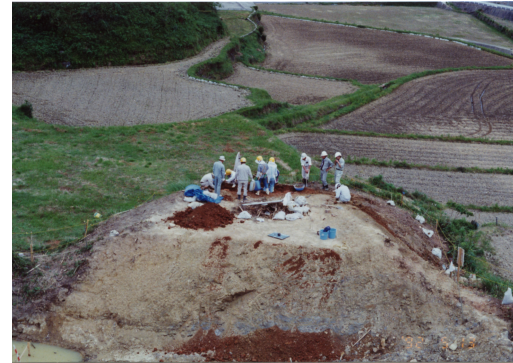


ふじ かわら かま あと  
藤原窯跡

でん しょう かま しん そう  
～ 伝承の窯の真相～



藤原窯は1857年(安政4)に出版された『本朝陶器攷證』によると、豊臣秀吉の朝鮮出兵(文禄・慶長の役)の際に連れ帰られた朝鮮陶工巨閑の子、今村三之丞が質の良い陶土を求めて領内を巡り、日宇村早岐より一里を隔てた藤原山で焼き物を焼いたと記されています。さらに、操業した時期については、寛永期(1624～1643)と伝わるも記されています。つまり、藤原窯は三河内焼の基礎を築いた今村三之丞が開いた窯といわれていました。



発掘調査の様子



現在の藤原窯跡遠景

藤原窯跡は、「もみじが丘団地」北側の斜面にあります。この窯は、器の表面に刷毛で白い化粧をした刷毛目という技法の焼き物を生産した江戸時代の窯として、古くから存在は知られており、1977年(昭和52)に佐世保市が実施した三川内古窯跡群の調査で、その位置が明らかとなりました。

江戸時代、肥前平戸領において生産された陶磁器は「平戸焼」と称され、1771年(明和8年)に平賀源内が書いた建白書『陶器工夫書』にも、その名前が見られます。その後、江戸時代後期以降には、平戸焼の主な生産場が三河内(現在の三川内地区)にあったことから「三河内焼」と呼ばれることが多くなり、現在では、佐世保の伝統産業となっています。

1992年(平成4)に、もみじが丘団地の開発に伴って発掘調査が行われました。開拓などによって大部分が破壊されていましたが、窯跡からは刷毛目陶器碗、皿、火入などの日用雑器が多く出土しました。これらの遺物はいずれも、18世紀前半(享保期:1716～1735)のものであることが分かりました。これによって藤原窯は、古文書の記録とは異なり、今村三之丞が生きた時代より100年も後の時代に操業していたことが分かりました。

刷毛目陶器は18世紀に三川内地区で大量に生産されたことが分かっています。恐らく一時的に流行し、生産量を増やすために、藤原窯が開かれたと考えられます。

刷毛目技法は、三川内地区の木原町で今も受け継がれています。



藤原窯跡から出土した刷毛目茶碗

◆ 問合せ先

佐世保市教育委員会  
社会教育課  
TEL(0956)24-1111



※「三川内」は、江戸時代の古文書に「三河内」と記載されているため、江戸時代の説明には「河」の表記を採用しました。